

(8) 港運会社経営者のオーラルヒストリー

語り手：岡部秀年（第一港運株式会社会長）

1941年3月30日生

聞き手：田上繁、森武麿、安田常雄

若宮幸一、松本和樹

同席：渋谷幸子

聞き取り日：2012年8月8日

場所：第一港運(株)（若松区本町）

昭和41年までの港湾荷役

岡部： その当時、洞海湾って治安も非常に悪かったですし、急激に発達した港ですからね、人手が足りないでしょ。四国とか山陰とか九州の田舎の方から農家の二男、三男が大挙して、「若松港にすれば飯が食える」と。当時はそんな働く場所ないですから、ぐーっと若松港に流れ込んで来た。その中の1人が『花と龍』の火野葦平さん、玉井金五郎さんもその1人ですよ。そしたら、夜な夜なこうね、仕事してたら肉体労働ですから辛いでしょ。強い酒呑んで、当時は必ず日銭ですから、金持てばやはり酒呑むか、博打するか、[] 買うとかで、夜な夜な喧嘩が絶えない訳ですよ。その当時に若松の親分として君臨していたのが吉田磯吉さんね、当時はね。1つは警察力がまだ弱い時代ですから、そういう人たちがやっぱり町を力づくでね。また、住民からも尊敬されて。当時は本当に俠客ですか、そういう人たちが結構、地域住民からも尊敬されて。だから、吉田磯吉さんってのは、もう清水次郎長に次ぐくらいの親分ですよ。残念ながらあんまりねえ、名前は出てこないですけど、それこそ、山口組なんか元々ここから出ていったんですからね。2代目改組してからですね、ここから出ていった

んですよ。

安田： 今までうかがったところで、いろいろなところからかなりここに働き口を求めて来るといってお話だったんですけどね、どの辺から来る人が多かったんですか。

岡部： 四国辺りが多かったですね。

若宮： 四国、それから、瀬戸内です。

安田： 瀬戸内が？

岡部： それから、あとは山陰。

安田： 山陰。そうですか。

岡部： 当時はあまり作物も穫れない。そういう僻地の人たちの農家の二、三男ってのは本当に働き口なんてないですから。若松に行けば、なんとか石炭の仕事が、筑豊に行けば炭坑が人手を失ってる、それぐらいしか働く場所がないんですよ、当時ね。そんなに会社の数もある訳でないですし。手っ取り早いでしょ、肉体労働は。学問が必要ある訳じゃないし、身体1つで働けると。ここはやっぱり、身1つで働けますから。気性が荒い輩やから仕様がないですね、どうしても夜な夜な喧嘩が絶えないんですよ。

安田： 筑豊なんかも相当いろんなところから来ますでしょ？

岡部： そうですね。あの当時は炭坑の方がもっとほら、住まいは提供してくれるしね、それから

食事は出る、風呂はタダと。労働者にとっては一番有難い場所なんです。それに、三度三度飯は食えるから。ただし、命がけですからね、落盤があるから。いつ死ぬか分からんけれども、そんなこといってられる時代じゃないでしょ。それと賃金もよかったですしね、仕事量の対価ですから。

安田： 例えば、給料でいうと、昭和45年過ぎだったら？

岡部： わたしどもの会社のところでいうと、そういう労働者を脱落されても仕方ないからね。昔、昭和41年前まではですね、要するに親方がいましてね。そっちに会社としては親方だけを採用しておくんです。うちの会社で僕がいたとき7人いましたね。彼らが全部差配してくれる訳ですよ。例えば、「あした(明日)は何人いるから」ていって、「あしたは20人」とか、仕事によって会社から指示受けたら、親方がそのように集めてくるんですよ。で、1日の仕事の出来高によって、会社が直接ボーシんに金を渡す訳ですよ。親方が子方に金払う。だから、会社は一切労務管理はないんです。そういうシステムで。こっちは石炭の仲買人ですから、われわれに仕事をオーダーする立場なんです。われわれは仕事をもらって、あした例えば、「前の会社の中央スイカン(会社名)は何人要るから、お前のところから何人連れて行け」って会社から指示する訳ですね。で、渡したお金の中から労働賃がいくらだとか。

安田： そういうの例えば、筑豊とか、炭坑の場合は中間のところに必ず納屋、その名前があるんだけれども。

岡部： 会社として労務管理するような時代じゃないし、そうしたら管理が大変ですから、そのような手っ取り早い、親分をおいとして、「あした何人連れて来い」っていったら、必ず用意して会社の要望に対して満たすと。会

社としても重宝がるし。

安田： で、炭坑なんかの場合、これはいろんな研究があるんですけども。昭和の初めくらいかな、になると、例えば、納屋制度とか、親方とかいうのをあいだに挟んだ雇用関係とか、労資関係がだんだんと少なくなってきて、なるべく会社が直接、炭坑のいわゆる坑夫ですよ、坑夫とのあいだに成立する、なんというか直轄制とでもいうのか、そういうのにだんだん移行していくって……。

岡部： われわれの業界もだから、そういうスタイルに今の国交省、当時の運輸省が指導して、「不正な労働者を遣うことはならん」と。当時から暴力団とかもいましたしね。そういう輩がはびこっていることに警戒して、「会社としてそんな人間は遣っちゃいかん」ということで、港湾労働法っていう法律ができましたから。で、一人ひとり労働者を名義人としての登録制、制度にしたんです。「登録していない人間は、絶対に遣うことならん」と。港湾労働者として一人ひとり写真撮っておいて免許制にして免許証を発行しました。これを本人に持たせておいて、なにか調査されたときはそれを見せて、実際、港湾労働者遣っているかどうか確認して。これやりだすとわれわれの業界もきつくなるんです。結局、仕事があってもなくても、われわれは波動性が高い。で、かといって、生産部門はラインで残業すれば、すぐ取り返せるものが、われわれは、1日は1日、「曆商売」なんで、1日も2日も稼げるわけじゃない。仕事がないときもあるでしょう。

安田： 登録制になったのはいつくらいですか。

岡部： 昭和41年ですね。

安田： 41年。そうだと戦後だね。

岡部： それまでは、だから、朝来たら会社内に必ず親分が連れて来た働き手がおって、会社としては楽だった。労務管理しなくてよかった

から。今はもうね、当たり前のことですけど、厚生労働省の監視の目が厳しいでしょう。われわれの業界は事故が多いんですよ。事故やると軽傷では済まないから。やっぱり結構行政指導の厳しい業界です。わたしどもの仕事っていうのは免許制でして、元は国土交通省の認可が必要な免許制で、免許のない業者が誰でも入り込んで、割り込んでわれわれの仕事をやるというのはできなかった。ある意味では保護されているし、ハードルは高い。

安田： ですから、結局、昭和41年にそういう制度ができるまでは、なんとなくやっぱり明治の習慣みたいなものが（残っていた）？

岡部： そうです。それぞれが親分子分の関係で。どうしてもそういうふうな風習でしたよね。親分とすりゃ、これからも仕事をポーシんに頼んでおけば、すべてやってくれる。

安田： ポーシんとしては？

岡部： 会社行って、あしたの予定聞いて、「どこどこ採用で何人だ」とか聞いて、自分で手配してやっていく。

安田： じゃ、ハシケ（艇）で働いている人なんかも？

岡部： ハシケの場合は少し違って、ハシケはハシケの別の名義がある。で、輪番制で、これは会社に全部登録してましたですね。

安田： 一人ひとり？

岡部： ええ。請負ですから、当時はね。仕事がなければ、会社はもちろん金を出さんけど。例えば、わたしどもにいっぱい登録してる専属へは、輪番制とかで順番に回してやらならん、行き渡るように。仕事によってここで積んで、例えば、宇部に行ったりとか、徳山の方へ行ったりだとか。だから、子供と一緒に生活できないです。それでさっきおっしゃっていたようなそういう施設がありましたからね。親は移動するんで、やむなく子供

をオカ（陸）に上げて預かってもらう。そういう施設がありましたね。僕らのとき、そういう子がクラスに何人かいましたね。

安田： さっきの賃金のお話をうかがっていると、どれくらいの比率になるんですか。会社と親方と、それから、働いてる人がいろいろなところから働きに来るということは、賃金がよかったということだけ？

岡部： そうですね、当時のそういう分かるものって、全然とっていないですね……。賃金は売上の3割超えると危険だっていうことでね、われわれの業界の場合はね。3割以内に抑えるっていうのが絶対条件なんですけども。当時は、そんなに会社としてはメリットはなかったと思うんですけどね。2割ぐらいの比率じゃないですかね。

安田： 賃金がね？

岡部： 賃金としては、労働賃金だけです。これは直接払いますから。で、今はそれに会社負担がかかってきますよね、保険料とか、防災費とかね。で、全体で3割近く、3割超えてるんじゃないですかね、労働者の賃金は。もちろん、作業員だけじゃなくて、職員の賃金入れて、会社全体の売上からみると。昭和41年までは、そういう賃金形態で会社はやってきた。

田上： そうですね。昭和41年までは？

岡部： そうですね。当時は、個人個人に渡すんじゃないくて、安田だったら、安田親分に払いよった。そりゃそれ、親分があとどうやって支払いよるか、われわれは関心はない。

安田： 一般のサラリーマンの給料と比べると、どの程度？ 労働者一人ひとりの？

岡部： 38年当時、（サラリーマンの）初任給がどのくらいかなあ。（こちらの労働賃金は）1万3千円くらいですか、その当時で。倍くらいですかね。

安田： 倍？

岡部： 倍といわん給料取っとったね。もちろん、ほかでなんの保障もないんでしょ。事故があれば自分で払わないけん、保険もなにもないですからね。倍以上の賃金払っとったんじゃないかと。だから、港湾の作業に従事しようとする人は結構当時多かったです。その代わり危険はともないますが。高倉健さんなんかも学生時代、あの人、エッセーに書かれてますよ。[] 当時の青年とかは終戦直後で、それこそ日本は貧しい時代ですからね。

港湾会社の免許制度

田上： 今のお話これまでうかがったところだと、船の仕事とハシケの関係では、両方備えられていたということですね。

岡部： われわれの場合は免許制ですから、荷役にしても沿岸荷役、本船荷役、船内荷役とか、あるいは、一般港湾運送事業で一種、二種、三種と仕事の中身によって別の事業になるんです。ハシケは三種事業で、当時はハシケだけの免許業者も多かったですよ。港がまだ整備がされていないので、全部沖荷役ですから、本船にね。だから、ハシケが不可欠なんです。どこの港に行っても重宝がられるし、仕事は捗る。だんだん時代とともにね、荷役形態が変わってきましたからね。今は「ハシケの免許所持してます」っていても、ハシケを使う機会ってのがないんでね。ハシケ自体は自分では運行できないから、タグ・ボートに引っ張ってもらうので、結構厄介なんです。

田上： オカからハシケに積む荷役と、本船とする荷役ってのはまた別の（作業で）？

岡部： いや、大体一貫作業です。

田上： そうですか。

岡部： だから、わたしどもは仕事受けたら、オカの荷物をまずハシケに積んで、ハシケを曳航して本船に横付けして、そして、本船に積み

替えると。

田上： その労働力を会社の方で集めるんですか。

岡部： ただ、ハシケはハシケのみで専属でいましたからね。沿岸の方は、沿岸荷役といってゴソウの業者がいますから。それはもう分業ですね。

田上： それは会社の中で分業ですか。例えば、五菱さんだったらオカだけだと。

岡部： あっちはもう沿岸荷役なんで。

田上： そういうことですか。こちらさんと一、二種、三種の免許があってハシケの荷役の免許があるから。なるほど。

ハシケと海運会社

田上： わたしの義理の姉の父親が退職するときに退職金みたいな形でもらって、自分が「オーナー」ってって、そういう方もいらっしゃるんですか。

岡部： います。

田上： そうですか。

岡部： 自分で請け負って会社に登録してもらって仕事もらってやっている人もいますね。それかと思えば、社員としてやっている人もいます。大体半々くらいですね。

田上： そうですか。

岡部： 自分で実際持っていて、個人の仕事でやるのか、会社で……。

渋谷： 「チャーター」ちいいよったでしょ、ね。「チャーター」ちいいよった。自分の船を第一港運に所属してもらって仕事をもらうんですよね。それで、「第一港運にうちの船をチャーターしとる」ちいいよったね。そういうもんでしょね。

親分子分関係と飯場

田上： 話はまた元に戻すんですけど、昭和47年ですか、7人の親方がいたと？ それで、親方1人に何人ぐらいが荷役してたんですか。

岡部： 大体 40 人から 50 人抱えてましたね。

田上： そうですか。

岡部： 本船荷役、当時大きな船が入って、1 万トンぐらい積んで入ってくるんですけど、船に行きますとね、船に「ハッチ」ってもんあるんですよ。船倉ありますよね。この中の 1 つの船倉の中に 4 つ「モッコ」ていいましたか、石炭をスコップで入れて、これを 4 つから 1 つのハッチに入れる訳です。そうすと、どれかが 1 つ満杯になると引き揚げるでしょ。で、これで降りてくるともう次の満杯になっとる。これも絶えずクレーンでしょっちゅういっぱいになったら揚げていく訳です。その 1 つについて大体 15 人から 20 人いましたかね。それが 4 つですから、1 ハッチ 80 人くらい入ってましたね。

田上： 1 人の親方がそれだけの？

岡部： そうです。

田上： 親方が人数を手配している、1 人の親方で何人とか。

岡部： だから、力のある人はやっぱり多いです。要するに彼らも何人って決めてかかってない。力があるやつはいる、力がないのはこれない、でしょう。力関係ってというのが働いて、会社がいろいろ使いよる訳。

田上： 大きなあれだから、じゃ、100 人ぐらいとか、あるいは、もう少し小規模とか。そうすると親方が 7 人いて。飯場を借りていた？

岡部： []。目撃されとった。

田上： 賃金は、親方に払うのは 1 回分でいくらって？

岡部： そう。上がった当初は分かりますからね、そのとき決めるんです。この荷物はいくら、いくらで決めていますから、貨物によってやはり違います。[] 石炭だとか。現金で計算して。

田上： 親方だけに交渉して？

岡部： そうです。

田上： 親方がそれを受けて子方にちいうことですか。

渋田： 第一港運のゴンゾウさんは、大体どの国っちゅうか、里はどこが多かったですか。

岡部： まあ、四国方面とか、九州の田舎の方から、熊本から来た人とかおったしね。山陰から来た人もおったし。それで、ここは、そのころはね、帰るのを引きとめるんですよ、正月に。やっぱり帰りたいでしょ。除夜の鐘が鳴っても仕事に出る、帰さんように、帰えさんようにするんですよ。帰ってしまったら仕事できんけね。だけど、働く人は帰りたいた訳ですよ、お土産買ってね。それで 1 日、2 日ぶらぶらして泊まらせてね。

渋田： 第一港運が一番大きかったでしょ、班が？

岡部： そうですね。

渋田： 山九にもなんか、わたし何人か知ってる親方おるけど。橋口班、道念班、それから。

岡部： 竹内、大内、田上。

渋田： 田上ですね、一番大きかったですね。そして、飯場みたいに造ってるのは、道念さんのところと橋口さんのところだけやったんですか。

岡部： いや、いや。飯場は会社で持とった。

渋田： あっ、そうなんですか。フクチ寮？

岡部： あれは個人で買って、会社が保有しとったね。

渋田： そうですね。会社からいくらかその？

岡部： それは当然。

渋田： 出してやって。それで子分からまた、橋口さんたちがもらいよったんでしょ？

岡部： それはまあ（笑う）。中でやっとなこと、ここでいうのもあれですが。まあ、考えたら頭いいんでしょ。自分のところの働き手に金貸す訳ですよ。そしたら、絶対貸し倒れはないでしょ、自分が金を預かってる訳ですから。本当に相当頭ええ、でも、あくどいですよ（全員笑う）。

石炭会社・海運会社とハシケ船主

田上： ハシケの場合には、先ほど大体1万トンほど（あったと）？ これは、個人所有のものも含めてですか。

岡部： いや、会社所有してるだけで。

田上： ということは、仕事としては、ハシケとしては2万トンということになるんですね。

岡部： そうですね。

田上： そうですか。そういう者たちが、例えば、会社の1万トンのハシケの関係としてはこちらに登録されてると思うんですが、個人の場合は、例えば、連絡とか、手紙とかっていうのはこちらの方に？

岡部： そうですね。会社がみんな持ちです、すべて。彼らは動きますからね。だから、手紙とかなんかは全部会社に、住所登録してましたから。

田上： それらの住所で？

岡部： そうですね。はい。

渋田： 今考えたら、「あんな住所あるかな」っち思うて。うちは「フタバ」だったんですよ。わたしの住所は、「新地何丁目か、山九運輸株式会社フタバ丸」（笑う）。そんな住所があるんかねえ。

岡部： 若松に帰ったとき、（手紙などが）あったら返す。一時預かる訳ですね。

田上： 1万トンのハシケを（持っていた）？

岡部： はい。

田上： 停まる場所っていうのは決まってるんですか。

岡部： ハシケ溜りていうもんがあって。もちろん、市が場所を決めてましたからね。

田上： 決まってるんですね。

安田： 決まっている？ だから住所になるんですよ。

渋田： 山九は九電かなんかの……。

岡部： 一番岸壁に近いハシケから外に向けられて、10列くらい並んで。ハシケづたいで歩

いて行く。

渋田： こういうふうには並んどってね。トモを階段の方に向けて、オモテは戸畑の方に向けて並んでたんですよ。

若宮： 写真見たら分かるかも。

田上： 貯炭場はいろんなところだから、どこか行きますよね。それで仕事終わると、誰かハシケで帰って来ると？

岡部： そうですね。ハシケ溜りていうのが必ず決められてましたから、そこにちゃんと着けて上ってくる。

田上： じゃあ、個人所有のものはどうなんですか。やっぱし、こちらの方のところに停まるんですか。それともまた別の方に？

岡部： いや、いや、同じです。ハシケ溜りです。時間によっては中で生活してますから、夕飯の用意したり。だからもう、当時は銭湯は当然必要です。だから、この辺の銭湯さんも……。

田上： ハシケに関係する岡部さんのところの仕事は、取引先の会社からこちらの方に直接くると、そこと契約？

岡部： はい。炭坑、あるいは、石炭の仲買商社とかからオーダーが来て仕事する。

田上： それらは、大体どこの会社だとか決まってるんですか。

岡部： 大体流れは決まってるんですけど。三菱系、貝島系とかね、麻生系とか。若松が明治以降、一番都市銀行が増えましたね。当時、富士、三井、住友だとか。なんでかっていうと、当時、われわれのところに石炭契約しとるから買いに来るでしょ。こちらで買い付ける訳ですね。買うにしても当時は手形とか、小切手とか信用のある時代じゃないから、全部現金なんです。

渋田： キャッシュだったの？

岡部： 石炭買い付けに来た人たちがここでお金卸

して、一切金持ってって買うの。荷役賃とかね。

田上： そのあいだ、あれですよ。本船に積んだりする場合あるんですか。ボートで引っ張ってもらって阪神とか瀬戸内海まで行くことはないですか。

岡部： うーん。ハシケはあんまりそんなに遠海までは引っ張ってないね。大体こっからですよ、山口県ぐらいですね。あんまり遠方まで持って行くと、今度は逆に数合わないんですよ、そりゃもう、自走していける船の方が安いですから。

親方制から港湾労働法へ

岡部： 港湾労働法できて、会社が管理せないけんようになると、彼らたちみたいのは理解できない訳ですよ、こういう法律の問題とか。

渋田： 会長、怨まれとったね（全員笑う）。

岡部： 理解できん連中ですから、それはしたくないちゅうのはあるんでしょうけど。なんかあるとやっぱり、まだまだ刺青ちらつかせてね、脅しよる。そういう風潮があるんですよ。喧嘩であるとかいろいろあるでしょ。「やってみせえや」て。根が図々しいもんやけ。今はできんけど、やりおったんですよ。彼ら「忠誠心」とかいうものの言い方する訳ですよ。昔の極道とかってそんなのでしょ。「お前ら、その会社がどうあってもいいのか、いの一番に協力するのが極道の鑑じゃねえか」と言って、「お前ら、日頃言ってること嘘っぱちか」と。そんな簡単に負けよったらね（いけんからね）。

田上： 貫かなきゃいけないこともあるでしょうからね。

岡部： わたし若いころね、会社から家に毎日夜帰るのをね、（家内が）怖がりよったんですよ。

渋田： 「社長に言うとして」ち、「毎日、月夜ばかりやない」ち。「闇夜もあるぞち言うと

け」って、怖かったでしょうね。

田上： 奥様に？

渋田： 奥様、全然会社のことタッチしてないから、帰っても先代もいろんなこと話しよらんやったんでしょうね、奥様にね。で、なんも知らんで突然来てから、こうでこうで、「月夜ばかりあると思うな言うとき」って言われても怖いですよ。

田上： 中途半端に知るより知らない方がいいんでしょうね、奥様の場合はね。仕事は男が外でやるもんだという……。

岡部： こっちまだ若いしね。今じじい（爺い）やけど（笑う）。

渋田： やめなきゃいけんごとなったんですよ、この時代の流れで。

岡部： やっぱりね、世の中についていけんから、それはもう仕様がなしでしょうね。いろんな法律とかできてきて、今までやってきたことが180度変わってくる。それに対応し切れんと去らざるをえないし。

渋田： 橋口のお兄さんはね、「俺はやめたくないけど、俺をやめるように絵を書いたやつがね、約1名」（全員笑う）。誰かおられますか（笑う）。

岡部： 俺のこといいよるんやろ。やめないかんちゅうのは、自分で理解できんでね。「ついていき切れんかった」って、そりゃもう、いつの時代もそういう人はいますよ。

安田： それから昔からいわれる、それこそ極道といわれるものも、そういうものが、だんだん暴力団と一緒に捉えられるようになってきてますよね？

岡部： そうですねえ。やっぱりねえ、真のね、ああいう人ってのは口に出さないですよ。分かりますね。口に出す人間ってのは、脅しとるだけで、なんの価値もない。僕らはもう見透かしとるから、実際問題、「闇夜もある」っていったって、脅しの1つでしかない。実

際、度胸が据わってる訳でもなんでもない。やっぱり同じ業界で仕事してる訳だから。立ち回りとかね、分かってない。

渋田： 夕方になったら着流し着てね、刺繍絞りの帯をぐるぐるに巻いてね、ちょっと格好よかったですよ。

岡部： 初代なんかが、そういう仕事終わって、夜な夜な連歌町が盛んなころでしょ、遊郭もあったし、に出てって、いつもやっぱり行くときに脇差とピストルは持って。いつ襲って来るか分からんから。

森： やっぱりそういう時代なんでしょ？ 明治ですからね。

ハシケへの積み卸しについて

岡部： 今の若松の中心ってのは、港湾の荷役は響灘がもう公共のバスが整備されましたので、荷役ってのは向こうに。岸壁ですからね、結局、ばーっと持ち込んで行って、そこに落としたのをトラックで持ち込んで。今もうハシケっていうのは必要ないです。横付けするにはボートでもいいし、岸壁に直接着岸できれば、ねえ。

田上： 岸壁に大きなものを着けることができる。当時はそこまでのものはなかったから沖荷役になる。なるほどね。

岡部： 若松の町が栄えてたちゅうのは、やはり石炭の積み込みですよ。

田上： 当時は石炭以外にも？

岡部： 今は石炭はないですよ。

田上： 当時です。

岡部： あっ、当時ですか。当時は他の荷役も結構いろいろありましたよ。変わっていききましたよ。

田上： 材木とか？

岡部： ええ。明治製菓の砂糖の荷役とか。そりゃ、砂糖は免税だから、盗むと税関で捕ま

るの。作業員が砂糖を盗んで帰りよる。ところが、外国の貨物でしょ、まだ通関しないで勝手に持ち込むと、税法上違法になる。われわれはその輸入の貨物を国内に持ち込むのと、国内の貨物を輸出するときは、外国に貨物を輸出のための通関業務が必要なんだけど、そこら砂糖を勝手に持ったり、入り込んだりすると違法になるの。

田上： ハシケでするとしたら、石炭のときは真っ黒になってるじゃないですか。それ、ほかのものを積むときは？

岡部： だから、戸畑の岸壁でやるのが速いのは、日水さんとの共同の岸壁に、そこに着けて岸壁で直接揚げるんですよ。ハシケは使わない。

田上： 使わない、そうですか。ハシケの場合、石炭は9割くらいですか、荷物は1割くらいですか。

岡部： 荷物、違うもの積むときは洗わないんでしょう、木造船のときはね。鉄船になってからね、洗って荷物積んだりなんかしよった。木造船は一度積んだら真っ黒ですからね。

渋田： 1斗缶に水飴が入ったのをね、積んだことがあるんですよ。そしたら、なんか監督さんみたいな人がサシちょっと突いてですね、口開けたらですね、ばーっと水飴が広がって、いっぱい水飴になったことありましたね。

田上： あれは船主が洗うんですか。

渋田： そう、そう、そう、そう。

田上： じゃあ、重労働ですね。

渋田： 全部中きれいに洗うんです。あの、あとはなんか、ホースみたいなんで、そのところ洗ろうてからね。ほして、1回1回こすってきれいに洗わないけんですね。

(9) 造船会社経営者のオーラルヒストリー

語り手：稲益敏幸（稲益造船株式会社社長）

1937年8月23日生

聞き手：田上繁、若宮幸一

聞き取り日：2012年8月10日

場 所：稲益造船(株)（若松区今光）

洞海湾の変容と造船業

田上： こちらの方の造船業てのは、稲益さんのときに立ち上げられた、それとも先代？

稲益： わたしの親父がね、大正14年に久留米出身なんです。久留米から小倉の親戚を頼って、こちらに出て来て、藤ノ木新栈橋で便利大工、造船所でなくて、わたしも唐戸町で生まれたんです。「大工さんちょっと来て、うちの船修理してくれや」、当時はシャリキ、シャリキね、リヤカーに道具を積んで材料積んで、藤ノ木新栈橋まで仕事に行った。わたしも唐戸町で生まれた。

田上： そうですか。

稲益： で、ここに親父がレールを敷いたのが昭和10年ですね。私生まれる以前にここにレールを敷いたときは、みな洞海湾は木造ばかりだった。主にハシケ、うん。当時はね、筑豊の方からどんどん石炭を積み出して来て、新栈橋から運び出していた訳ですよ。石炭を積み込むための機帆船がひしめいていた。

田上： はい。船と鉄道で。

若宮： 鉄道ですね。

稲益： もう電車で石炭を運び出して来てね。で、藤ノ木新栈橋から上（かみ）の方に、木造船ですよ。運び出して来よった。いわゆる「花

と龍」の時代ですね。

田上： わたしも高校までこちらで育ったので、そこら辺のことは少しは知ってるんですけど。

稲益： ああ。それが石炭がまったくなくなって、今度は八幡製鉄、鉄の町、大型本船が入って来るわね。うん、八幡製鉄の製品どんどん積み出しよった。鉄の町に変わったんよ。石炭の町、洞海湾から洞海湾は鉄の町に変わった。ところが、若戸大橋ができて、本船が入らなくなった。なんと八幡製鉄の溶鉱炉が、今はジェットコースターになった。若戸大橋からわたし洞海湾を見下ろして見た。がらん、がらんですよ。船の姿が見えん。で、当然ね、われわれ船の病院、船のお医者さんも数が減った。

田上： そうですよ。

稲益： 船がいてこそその洞海湾だ。がらん、がらん。長崎の方とかね。みんなあちこちからやって来よった。貨物船、昔は木造船ですね。機帆船、小型鋼船、これも荷物がなくなって、みな陸上、トラック、高速道路。みんなやめて、残るのは数えるだけで。で、今申しますね、わたしは親父の手伝い入って、わずか60年のあいだに洞海湾のわれわれ同業、同業現れては消え、社名と経営者変わるんですよ。26軒、26軒目がね、北湊でやっ

ていたニッスイマリン工業、日本水産の系列。

若宮： 元若松造船。

稲益： ニッスイマリン工業の前身が若松造船。若松造船の前身がくきの海造船。そういうふう
に社名と経営者変わる。26軒、今残るはわ
ずか3社ですよ。うちと日本造船と東洋造
船。で、今わが社の仕事仲間、従業員がち
ょうど50名、50名。ほとんどがその中の1
人、2人が「何とかつこうてもらえんでし
ょうか。苦しい思いしたくない。お宅で一生懸
命頑張りますけ、頑張りますけ」という人た
ちの集団。違いますね、根性が。[]、そ
して、最後来てくれたのが、ニッスイマリン
工業から来てくれた営業の村上と、造機の岩
熊氏。それが最後の造船所だったんです。
ちやうどうちの親父がね、旗揚げしたころ
が、洞海湾の華でした。

造船業の経営

田上： ハシケはやはり40年代まで造られてたん
ですか。

稲益： そうですね。

田上： そいで、最初は木造ですよ。それから鋼
船ですか。

稲益： うちはね、新造ていうよりも修理が主体で
すね。

田上： 修理が主体。

稲益： 新造主体の造船所ていうのは、修理の少な
い、近所にね、船の少ない造船所が全国から
注文を受けて、新しい船を。ところが、若松
の造船所は、新造船を造る暇ていうか、余裕
がない、修理で。

田上： 新造船を造っている会社もありました、若
松に？

稲益： いや。当時から少なかったですね。修理が
主体。当時は新造するところは四国の方とか
ね、鹿児島、熊本の方とか。やはり、その近
くに船が少ないところとか、遠くから注文に

来るんですよ。

田上： あっ、四国とか。

稲益： 鹿児島、熊本とか。

田上： 鹿児島。

稲益： 熊本あたりは新造船が主体です。ていうの
も、全国から注文が。

若宮： 例えば、その材木が豊富にあったとか、材
料が手に入りやすかったとか。

稲益： そうですね。それもありましたね。

若宮： もちろん場所と海とですね。四国でしたら
今治とかあっちの方ですか。

稲益： そうですね。尾道とか。

造船の技術と修理

稲益： だけど、親父たちの時代は、木造船、大工
さん、船大工さんが主体ですよ。それか
ら、その上架をした船底のところにまきはだ
を詰める。

田上： まきはだとは。

若宮： 木と木の間のすき間を水漏れしないように
すき間に詰め込む。

田上： じゃ、社長さんはお父さんからいろいろ技
術を習われて。

稲益： そうですね。だけど、わたしは親父の手伝
い始めて、そのなんていうかなあ、親父がわ
たしに任してくれるころには、木造からこん
だ鋼船にだんだん代わりつつありましたね。

田上： それは昭和でいうと、何年ぐらいでしょ
うか。

稲益： 昭和何年ですかね、35年ぐらいから40年
ぐらいにかけてですね。鋼船に代わりまし
たね。

田上： 鋼船にねえ。じゃ、その木造の船大工さん
のような方は、またそこから鋼船の技術を？

稲益： そうですね。

田上： そうですか。社長さんもまたそういう形で
鋼船の方の修業を？

稲益： そうですね。

田上： そうですか。木造の場合のときの船大工さんていうのは、やっぱり若松の方が多いですか、職人さんは。

稲益： そうですね。若松の方々が一番多いし、それから、壱岐とか対馬とかね。あっちの方からも結構来られてね。

田上： じゃ、その木造が最盛期のときには、何人もの大工さんを、船大工さんを抱えられていたんですか。

稲益： わたしが、親父のとき始めたころは、はい、5人しかいなかった。

田上： それから、一番多いときは何人ですか。

稲益： 今50名くらい。

田上： ハシケの場合には、修理はやはり船会社から依頼されお仕事が来る？

稲益： いえ。

田上： 個人から来る。

稲益： 一隻、船主船長ですね、船主船長。自分が船乗ってね、運航して。

田上： ええ。例えば、第一港運さんてご存じですかね。一昨日お話聞いたんですけど。自分とこでも1万トンくらい持ってたと。それで個人所有の方も、大体半々くらいを自分のところで抱えていたちゅんですけど。そうすると、第一港運さんの船ですと、やはり会社から依頼が来るという、そういうシステムではないんですか。

若宮： そういうこともある。

田上： そういうこともある。それと、個人的なハシケの所有者からやはり来る？

稲益： はい。

田上： やはり大体半々くらいですか。

稲益： 半々くらい。

田上： 修理ていうと、どういうところが一番傷むんですか。素人が全然分からないので、こういう質問を。

稲益： 定期的にそのドック。

若宮： 船底とか。

稲益： 船底掃除して、ペンキ塗ってですね。

田上： なるほど。

稲益： カキがいっぱい付くと、虫が付くとですよ。ね。

田上： なるほど。どこか壊れたから修理するということもあるんでしょうが、そういうメンテナンスですか。

稲益： 定期的ね。定期的にドックをしとかないと、はい、寿命がないんですね。定期的にドック。

田上： 大体1年に1度ぐらいは？

稲益： そうですね。大体1年に1度ぐらいね。

ハシケの構造

田上： ハシケでは大きさが、木造船でも大体おなじような大きさですか。

稲益： はあ、大体おなじような大きさですね。

田上： おなじような大きさですか。それはもうある程度図面があれば、おなじような形、形もほとんど変わらない？

稲益： そうですね。おなじような形ですね。今でいう、トン数でいえば100トンくらいですかね、100トンくらい。

若宮： 積みトン数で200トン？

稲益： いえ、いえ。積みトン数で100トンですね。

田上： 100トンくらいですか。石炭100トンくらい積んで、それで前の方にあれがある？

若宮： 前の方に居住区がある。

田上： 居住区があるんですね。石炭のあれはなんというんですか。そこ積むところ、ドウノマとかいう人もいるんですけど。

稲益： ドウノマていうのは、荷物を積むところ。

田上： 荷物を積むところ。なにか特別なそういう名称とか、船の。

稲益： ダンブルとか荷の間とか。

田上： 居住区、居住区は居住区ていうんですか。

稲益： そうですね。船員室とかね。居住区。
田上： で、その上に、あの居住区ちゅうのは、そういうところの横のところにある？
若宮： 前にある。
田上： 前の方にあるんですね。
若宮： オモテ側にある。
田上： それに上に出たところになにか、あれはなんですか。食事とかするところですか。
若宮： とか、炊事場を造ったり、水場を造ったり、水桶を置いたりですね。
稲益： 水桶を置いたり。建物の中にすべて収まっていますかね、はい。その船の前側か後側どっちかにですね。
田上： それはタイプが2つあるんですか、前と後ろという。
稲益： その前もある、後ろもあるという船はいませんよね。どちらかですよ。
田上： 居住区のことですか。じゃない。居住区、後ろの場合もあるんですか。前もある。で、その上に出たところにそういう台所とか、それでなにか荷物を入れたりするちゅうところもありますか。
稲益： ええ、部屋の下の方にですね。船底の方ですね。
田上： で、トイレもちょっと囲った、あれはいつも、どこも後ろですか。
稲益： そうですね、トモの方。
田上： トモの方？
稲益： 前の方にある船もいますけどね。大体後側。前の方はその船引っ張って行くでしょう。そうすると、部屋があるとね、前が見にくいし、邪魔になるから。大体船は後ろの方に部屋が、建物が多いですよ。

砂船組合

稲益： 戸畑のね、砂船、砂船の船主船長、戸畑のね、砂船組合作ったのが、はい、当時の砂船の船主連中、凄かったですよ。当時、ちょう

ど港湾土木の忙しいころですよ、戸畑の砂船組合ができてね。広島の似島からみなやって来た人ばかり。

若宮： 似島。
稲益： これが木造船の砂船でね。芦屋の川口に突っ込んで行って、足場を組んで、担いで砂を積みよった。
田上： 砂船ていうのは、砂を運ぶための船ですか。
稲益： 砂を採って。
若宮： 採集して。
稲益： 芦屋のね、芦屋の川口で砂を採集して、それをあちこち運ぶ。全部足場を組んで、人の手で、人の肩で担いで砂を陸上に揚げてた。それが鋼船になって、ガット船いうて。
若宮： クレーンで。
稲益： クレーンでバケツで運ぶ。それ以前は全部木造船で担いで砂を積みよった。で、その戸畑のね、組合作って、砂船が15隻ぐらいおったかな。岸壁にずらーっと、その人たち全部広島の似島から出て来た人ばかり。で、戸畑の砂採取組合を作って。それがなんとね、鋼船になって。ところが、現在ね、現在もう港湾土木辺りに砂の利用がなくなって、全部トラック輸送になって、船が必要ない。全部やめたり、廃船したり、戸畑の砂船も少なくなった。
若宮： いませんねえ。
稲益： 全然おらん。
若宮： 若戸大橋の下から渡船場のところから、ずーっと着いてましたよね。日水の第二工場のところまで、凄かったですよね。それが、木船からこんだ小型鋼船に代わってですね。
稲益： そう、そう。ガット船に代わってね。
田上： これ何年ごろですか。広島の似島出身者が来てやってたというのは。昭和30年ごろ？
稲益： うん。昭和30年ごろ。一番栄えたのがそのころですね。
田上： 最盛期が。その船ていうのも、似島から来

る訳ですか。それとも、船はこちらの方で。

稲益： 似島から出て来た人たちが、こちらで事業、商売始めてね、居ついてしもた。で、組合も作った。

田上： 戸畑の方に。

稲益： だから、初代の人たちが似島から来て、2代目はこちらで生まれた人ばかり。大体2代ぐらいでもうやめましたね。2代目でやめた。

(10) 船食会社経営者のオーラルヒストリー

語り手：中野種洋（中野船食社長）

1942年8月23日生

聞き手：田上繁、森武麿、安田常雄、若宮幸一

松本和樹

聞き取り日：2013年8月5日

場所：中野船食（若松区本町）

船食の開業と朝鮮戦争

安田： さきほどおっしゃった、昭和25年ぐらいから船食の仕事を始められたということですか。

この仕事自体は、戦前からあるんですか？

中野： この仕事自体は、戦前からあります。

安田： 25年ごろってというのは、なんていうのかな、やっぱり、そういう仕事がとっても必要になったという。

中野： ですね。

安田： そういう広がりがあるんですか。

中野： 朝鮮戦争がありよった。

安田： そのせいですか。

中野： こっから持って行くのが近いやないですか。それで向こうで食料がとられないから、「こっちで往復分積んでいかないかん」ちゅうな感じ。

安田： じゃあ、そのころ結構、船食をやる方も増えてる訳ですか。

中野： いや。

安田： そうでもない？

中野： うーん。特殊な仕事ですからね。それでこれ、船は免税品とかは積めるんですよ。空港で免税品買うじゃないですか、安い。あれと一緒に免税があるんです。そやから、権利を持たんところじゃあ太刀打ちできん訳なんですよ。それで、当時はもう、今と違って煙

草をみなよく吸うし。そうしたら、煙草は今410円ですけど、今（免税だと）210円ですか。

田上： 税金がかからなければということですね。

中野： 半値ですね。

森： 酒も？

中野： そうなんです。

田上： それを積んで出すことができた。

中野： はい、はい、はい。だから、どうしてもほかの人は入られん訳なんですよ。当時は酒類免許でいったら、今みたいに簡単に出らんですよ。もう酒屋さんに3年か何年か奉公して、そして、まあ、「お金が回せるな」ちゅう人ぐらいしか出してないんですよ。今はもうね、スーパーだったらどこでもすぐ出すという感じですよ。で、権利を譲ってもらっただけでも、当時はもう300万とか。ああ。

田上： 300万、400万、500万の話ですか。

中野： そやから、わたしらもこの仕事をやめたらですね、「退職金代りになるなあ」って思いよったんやけど、今は（全員笑う）。タダ同然ですね。

森： 先ほどの船を送った朝鮮に、朝鮮半島にも物を運んだ訳ですか。

中野： そうですね。新日鐵とかああいうようなと

ころから朝鮮半島に。新日鐵やら。

森： 軍需品なんかも運んだ？

中野： 軍需品やらいろいろ向こうで。肥料なんかもあるやろうし、そこは、旭硝子が肥料作りよったんですよ。

森： 旭硝子ね。それを朝鮮半島まで？

中野： はい。それにあの黒崎の三菱化成ですか、あそこが、飼料作りよりも。コークスやら、肥料やら作りよりも。それを持ってくのに、食料ですね。

森： 食料がね。朝鮮戦争で直接米軍だとか、上陸した場合の米兵に向かうということはなかったんですか。

中野： 米兵はこっちから出らんのですよ。佐世保とか基地があるやないですか。

森： じゃ、民間の？

中野： そうですね。民間の日本郵船とか、大阪商船とか、山下新日本汽船とか、いろいろありますわね。

森： なるほどね。景気がよかったときに乗った訳ですよ、お父さんはね？

中野： そうですね。

森： それが始まり？

船食の経営

安田： ちょっとその、ファックスの注文が来るという、もう1つ前の時代はどんな格好だったんですか。

中野： 注文を聞きに行きよったんですよ。

安田： じかに聞きに行く？

中野： 船に。

安田： 船に？

中野： はい。

田上： 中野さんが？

中野： はい。車で رفتたり、船で رفتたり。ブイに付いとる船は船で行くし。

田上： 接岸しているのは車で行く？

中野： 車で行くし。

田上： それは、初めてでも？ 今までの取引がないでも？

中野： ないでも。

田上： ああ、そう。営業？

中野： 営業です。

田上： へえ。

安田： 御用聞き？

田上： 御用聞き。だってほら、何軒もあったでしょ、前は？ 中野さんのところだけじゃなく。

中野： 前は4、5軒あったんです。

田上： それは順番で？

中野： 順番とかでなく。

田上： 行って？

中野： 行って。

田上： 敢えて自分が行けるといふ感じ？

中野： はい。そうです。

田上： 競合するときもある？

中野： あります。

田上： そのときは？

中野： そのときは、お客さんに決めてもらう訳ですね。

田上： それは値段の問題とか、その納入方法とか、いろんな名義的なものとかも含めて？ じゃなくて？

中野： ほんなら、船ていうのはですね、とにかく、船会社ありますよね？

田上： ありますよね。

中野： その船会社の中でも、「AさんとBさんとCさんは中野さん、えーっと、A、B、Cだから、Dさんは何々さんとか、若宮さん」とか、大体決まっとるちゅうか、その自分の好みで買っていい訳ですよ。

田上： ほお。船に乗ってる人が？

中野： はい。大体「指定制」っていうのがあって、会社から2軒か3軒くらい、指定してる訳なんです。その中で「サービスのよい物を持って来られるところに」ちゅうこと

で。それは自分が注文聞き行かんやったら、「うちもいいですよ」って取って来られる訳ですよ。

田上： まあ、事前に会社が大体指定する船食さんがある訳ね。かといって1軒だけでなく、やっぱいろいろと。

中野： いや、1軒の場合もあります。その前が競争で、船にも1番に行って、船が入って来よるじゃないですか。自分の船を持って行くやないですか、横に。それで海賊と一緒にですよ、飛び乗って（笑う）。

田上： その場合、じゃあね、船会社の方に先になにか。

中野： いや。指定制度ができたのがその後です。その前は海賊と一緒にですよ。早よう行った者が勝ちみたいなもんですよ。

田上： その分かれ目で何年ごろですか。

森： 指定制度ができたのは？

中野： 指定制度ができたのは、40年くらいやなかったですかね。

田上： あー、もうそんなあれですか。40年ころね。じゃあ、それ以前は早い者勝ちというか？

中野： まあ、早い者勝ちとか、顔見知りとか、今まで何回か取ってもらったこともあるお得意さんとか。いろいろあるんです。

船食とハシケ・機帆船

田上： お父さんも戦争に行かれる前はいろいろ、諸式さんということで乾物をやられていたから……。

中野： そうですね。

田上： すぐ船食の方に移ることも可能だった？ その中野さんというか、お父さんが始められる前に、近辺の方が船食をやられてたんですか。

中野： そうです。

田上： むしろ、後から参入された。

中野： 後から参入ですね。

田上： その方たちは、何年ごろからやってられてんですかね？

中野： そうですねえ。

田上： 大正ぐらいからやってんですかね？

中野： いやあ、大正はないでしょう。

田上： ないですか。石炭がこっち来て、大体いつごろですかね？

中野： 船食っていつて扱うんには、結構量がまとまった仕事をするんですよ。そやけ、普通の一般の商店に機帆船やなんかは買いに行つて航海に出よつたと思うんですよ。

田上： そのときは、まだ……。

中野： うちあたりは、ほとんど貨物船、鋼船ですよんね。はい。

田上： 船食さんも鋼船ではなくて、機帆船とか？

中野： そういふところはほとんどないと思います。

田上： ない。みんな鋼船を目的にして。

中野： 人間も乗ってないからですね。それと、機帆船の量が半端やないぐらい多いんですよ。それに配達するちゅつたら、人間なんぼおつても足らんです。

田上： そうすると、機帆船とか、ハシケ（舢舨）とかで住まれてる人たちはやっぱり、自分で接岸したときに買いに行くつてことで？

中野： そうですね。

田上： こちらにも？

中野： 買いに見えたりもしよつたです。

田上： それは現金で買い……？

中野： そうです。今の場合はキャッシュが多くなつたんですが、皆月末払いで。資金を寝かせないといけんから、やっぱしね。だれかれできないんですよ。

田上： そうですね。すぐ現金入る訳じゃないですからね。

中野： 1回の納品が70万、80万とするやないですか。そしたら、もうその1カ月寝かせるちゅうたら、だいぶ寝とるんですよ。

田上： 手形決済とかはなくて、小切手で決済ですか。

中野： いや、銀行振り込みで。まあ、相手も大きい会社ですから。船会社となるとやっぱり日本の有数、川崎汽船とか、日本郵船とかちゅうたらもう。横浜に山下通りとかある、あれ山下新日本、山下汽船のあれですよ。

田上： この近辺の鶴丸とか、飯野海運とか、そういうところはまた別の？

中野： いや、そういうところも来るんです。

田上： そうですか。その3杯ある船は、そこの取引になるのですか。

中野： はい、そうです。

田上： 最盛期は相当来てたんでしょ、鶴丸とかは？

中野： そうですね。1日に1隻とかそんな感じですからね。

田上： そうですか。

中野： 鶴丸の船が1隻、それで、最盛期のときは、今みたいに忙しくないですよ。12時間しかおらんとか、なんとかやないですもんね。もう、首つないで5日も6日もごろごろするやないですか。だから、もうゆっくりできますわね。

田上： 今みたい半日でっていう訳ではないから？

中野： 入港と同時に、今みたいに納めるのが、却っていいか分かんんですよ。長いことおったら、船の人も一杯呑みたろうから、ほんなら、接待もたまにはせにゃいかんやろうし、そんな感じで。

田上： 中野さんが接待しなきゃいけないんですか。

中野： そうですね、「たまに一杯、社長行こうや」いうたら、「いやー」ちいう訳にはいかんやないですか（全員笑う）。買ってもらわなかんし、ね。

田上： このいろいろ、あっちの連歌町あたりまで出張ったり、新地で遊んだりってのは？

中野： わたしらのときは新地の。

田上： あっ、そうか。昭和33年以降はないですからね。

中野： わたしのときは、あと1年早かったら遊郭行けとったんだけど。

田上： 33年よ、あれは。

中野： 禁止になった。

田上： お父さん亡くなられて3年、30年間、だから3年間。高校生ですからね。

ウロさんと船食

田上： 中野さんのところは、若宮さんから少しうかがったんですけど、そういう比較的沖に停まっている大きな船のところに納入する場が多い？

中野： はい。

田上： で、40年とか30年とか20年代に、そこにもうたくさんのがいたでしょ、ハシケとか。そういう人たちも当然食料は必要ですよ？

中野： そうですね。

田上： そういう人たちに届けるっていうか、するのもやはり船食さん？ それとも彼らは自分で買う？

中野： 彼らは自分で上がって、町も近いし。そやけ、すぐ前にハシケのこう、あったんですよ、停まれるところが、うちの前々ぐらいに。で、昔はその、終戦当時はうち配給しとったから、うちからお魚とかをうちに買いに来よった。

田上： こちらの方に？

中野： というか、物がなから、なんか昔みたいに切符切ったり、なんたりで、米の配給とか、野菜とか、なんとか配給があるやないですか。あんなのは、うちがしよったですけども。そのあとは自分たちで買いに、市場がすぐ近くにもあるし。それと、「沖ウロさん」っていう……。

田上： ウロさん？

中野： はい。ウロさんが。「沖ウロ」ていうんですね。沖に出てうろうろするからウロさん、いや、どうか知らないですけど。いろいろいわれるから。それにあの沖ウロさんにいくのに資金的なあれがないもので、品物をうちから沖ウロの船に出して、そして、ぐるーっと回りよったですね。主に機帆船が多かったんやなかろうかと思えますよ。それも何年ですか、30年後半にはほとんどないようになって。わたしがたまに見たんは、魚専用の沖ウロさんがおってね、それはあの各船、各船回って行きよったみたいですよ。

田上： 水とかなんとかも、水を売ってるウロさんを見たことがあるっていってました。こちらは、水は？

中野： 水は、うちは売ってない。

安田： さっきの沖ウロさんが一番いっぱいいたっていうのかな？ 全盛期っていうのはいつくらいになるんですか？

中野： そうですね。昭和20年の終わりから、30年の半ばくらいまででしょうね、半ば。40年くらいまでやっと思ったかなあ。ていうのは、ほらここは町が近いんですよ。だから、自分たちで買いに行くっていう人もかなりいたと思いますよね。町が遠いで、なんかわたしの聞いた話じゃあ、岡山の水島辺りは町が遠いで、沖ウロさんが多いちてから。

田上： なるほどね。

中野： あそこは三菱だな。

田上： 沖ウロさんっていうのも、免許とかなんかいるんですか。

中野： いや、伝馬船にちゅうか、どうだったかなあ。やっぱりあの伝馬船やったですね。伝馬船で毎日行きよったですね。

森： エンジンなしで？

中野： エンジンなしでね。

田上： 船からおらぶですかね？

中野： お得意さんがおりましたよけね。もう顔な

じみになつとるからね。毎日出るからね。

田上： その人たちは鋼船じゃないでしょ？ まったくの……。

中野： 機帆船とか、ハシケとかね。

田上： 相当この辺りにいたんですかね、人数的にね。お一方ね、まだいらっしゃるといいうんですけど、ちょっともう語ってくれない。年だからっていわれて断られてるんです。どなたかいますかね？

中野： はあー。もういないでしょ。

田上： 相当高齢なんですかね？

中野： わたしが20代から30代前までのときにもう（当時ウロさんは）60年代ぐらいですからね。そやけ、もうわたしがあれから40年経つとるけ、もういないですよ。

森： 沖ウロさんって、魚とか、水とか専門のウロさんもいるんですか。

中野： わたしも納品行ったとき、ちらっと見たんやけど、魚の沖ウロさんが専門で、それは後半出たんですけどね。エンジン付けてですね。ばあつと新日鉄の中から三菱化成から、三菱セメントですか。あの辺の洞海湾全部回りよったみたいですよ。かなりええ商売されよったんやないんやろか。

森： 海の魚屋さんて感じですかね？

中野： そうです。そやけ、魚の新しいの持って行ってやったら喜ぶんやないですか。

森： 町まで行かないでいいからね、いちいちね。

森： 行ったら、中に入って見るんですかね、買うときには？

中野： 見るでしょうね、自分の好みの。そやないと、なんでもかんでもいいという訳には（笑う）。

森： 写真残ってないだろうねえ？

中野： そのころの写真はないと思いますよ。今だったらバカチョンでもあってね、できるんやけど。そのころあんた、一眼レフとか

……。

田上： 構えないと駄目ですからね。貴重な資料
としますけどね。1枚か2枚あるんですよ
ね、若松図書館に写真があります。

中野： あっ、そうですか。あれはもう（貴重）で
しょうねえ、後世に残そうと思って写した分
でしょうねえ。